

Passiv について

— Zustandspassiv を中心に —

志 田 章

ドイツ語の受動 (Passiv) には状態受動 (Zustandspassiv)¹⁾ と呼ばれるドイツ語特有の表現形式がある。それはまさしく状態を表すにも拘らず、その過去分詞 (Partizip II) は、伝統的には形容詞と見做されてきたのであるが、形容詞的ではなくむしろ動詞的である様に思われる。本論考では状態受動のこの点について、本来、受動として能動 (Aktiv) に対するものとされていた事象受動 (Vorgangspassiv) をも考慮に入れつつ考察してみたい。

1

ドイツ語の所謂受動表現には様々な形式が考えられる。その中で状態受動は sein+Partizip II という統語形式を持ち、Duden 文法でも事象受動 (Vorgangspassiv, werden-Passiv) と区別され „Zustandspassiv“ 或いは „sein-Passiv“ と呼ばれている²⁾。このことからドイツ語では、状態受動という形式は一つの独立した表現様式になっていると思われる。しかし、他の言語、例えば、現代英語やフランス語などと比較するなら、受動の統語形式を厳密に区別するというのは奇妙に聞える。実際、フランスの言語学者フルケ (J. Fourquet) もドイツ語特有のこの言語現象を「ドイツ語は次の二つの受動を厳密に区別する。一つは或る能動に対応し、行為 (Handlung) を記述する werden で形成される受動であり、他方は主語及び sein+Partizip II から成る状態を記述する受動である」³⁾ と述べている。

歴史的に見るなら、印欧語には元々能動と中動 (Medium) の二つの態 (Genera verbi) があったが、中動の衰退と共に、その代わりとして受動

が使用される様になったことは周知の事実である。ギリシア語 *pathos* (情熱) をその語源とする受動は、古代ギリシア・ローマ時代では、哲学者及び論理学者によって論じられたが、それは後の言語学的研究を妨げる原因となった。しかし、19世紀半ば過ぎに、ガーベレンツ (H. C. von der Gabelenz) は、形態論及び比較言語学的観点から受動を考察し、言語学的受動研究の先鞭をつけた⁴⁾。今世紀前半には、フォスラー (K. Vossler) は、受動は *Leideform der Verba* であると述べ⁵⁾、これを批判したマイヤー・リュプケ (Meyer-Lübke) は、能動は *Tätigkeit*、受動は *Ruhe, Untätigkeit* を表すとした⁶⁾。ヴァイスゲルバー (L. Weisgerber) はフォスラーを批判し、1963年の論文の中で、受動は *Leideform* だけであるとは限らず、むしろ受動の本質は、行為者から目をそらした素質 (*Täterabgewandte Diathese*) であると述べ⁷⁾、少し遅れてエガース (H. Eggers) はこれに対し受動の本質は、事物に向けられた素質 (*sachzugewandte Diathese*) であるとしている⁸⁾。近年ではチョムスキー (N. Chomsky) は、受動には主語を隠す特徴があると述べている⁹⁾。

さて、論題を状態受動に戻そう。プリンカー (K. Brinker) は、1971年の『現代ドイツ語の受動』の中で、状態受動が記述するのは「到達された状態、或いは変化しない所与」¹⁰⁾ であると指摘し、ヘルビヒ (G. Helbig) も『状態受動』の中で状態受動は「動作主 (Agens) によって引き起された或る状態」¹¹⁾ を表現すると述べている。これらの見解に従うなら、状態受動を形成する動詞は或る限られた動詞に限定される。この点を詳しく検討するために C. R. L. G.¹²⁾ とヘルビヒの諸論文¹³⁾ を手がかりにしてみたい。

まず、C. R. L. G. の論文をしてみる。そこでは他動詞が、着点 (Ziel) との関係に従って、三つに分類されている。

- (I) 着点に向けられた動詞 (*zielgerichtete Verben*)
- (II) 着点に向けられない動詞 (*nicht-zielgerichtete Verben*)
- (III) (I)(II)の両特徴を持つ動詞

以下、それぞれについて説明する。最初に、着点に向けられた動詞 (以後 *zV*) は、事象 (*Vorgang*) を表し、その事象が動作主によって遂行された後に、結果として或る状態が現れる動詞である。次に、着点に向けられな

い動詞（以後 nzV）は、zV 同様、事象を表すが、状態が現れるのは事象が遂行されてしまった後ではなく、事象が継続する限りでしか状態が存続しない動詞である。zV では主語が目的語に影響を与え、或る結果に到達させ新しい状況を作り出すが、nzV では主語が目的語に働きかける限りでしか状態が継続しない。nzV は着点を持っていない動詞である。最後に両特徴を持つ動詞は添加語が付け加えられると nzv から zV に変わる動詞である。以上の様に他動詞を三つに分類する。

さて、次にヘルビヒの『sein+Partizip II によって形成される文構造の分類について』と題された論文を見てみよう。そこでは表題から分かる様に、文構造 Sein+Partizip II を持つ構文が意味の違いに従って、七つに分類されている。この中で、状態受動を形成するのは、彼がクラスⅢと呼ぶ構文に限られる。さらに、この統語構造に含まれる動詞は、C. R. L. G. の zV 型の他動詞のみである。以下、具体例を挙げながら、この点について説明してみたい。

zV 型の動詞に固有な特徴から分かる様に、クラスⅢを形成する他動詞は何らかの着点を持つ。ヘルビヒ (Helbig, 1987, S. 228 ff.) は、状態受動の本質を「進行性」ではなく「結果性」の中に認め、「結果性」を生じさせる前提条件として、「能動の主語と動作主の一致」を挙げている。このことから分かる様に、着点は「結果性」を産み出す境界であり、この境界を含む事象を意味する他動詞のみが、状態受動を形成する。まず、クラスⅢの例文を挙げる。

- (1) X öffnet das Fenster.
- (2) Das Fenster wird geöffnet.
- (3) Das Fenster ist geöffnet. (Ibid., S. 217)

(1)のXは動作主であり、(2)はXによって引き起された事象を表す事象受動である。動詞 öffnen は zV 型の他動詞で、この例文では「窓を開ける」という一連の動作、行為の結果を着点としている。(3)はヘルビヒが状態受動と認めている例であるが、それは着点に至るまでの経過を先行条件としている。この経過の最終的過程として Das Fenster ist geöffnet worden が考えられ、(3)は worden が省略された文ではない。(2)(3)

で問題になるのは動作主の解釈である。öffnen が他動詞である以上、主語と目的語は必然的文構成要素として要求され、名詞句 das Fenster は上の例文(2)(3)では目的語の意味的特性を持ち続けている。(3)を(4)と比較してみるなら、(2)(3)の das Fenster は主語の位置にありながら、依然として目的語の様な特性を持っていることが明らかになる。

(4) Das Fenster ist offen.

過去分詞 geöffnet は形容詞 offen と異なる意味を持つことが、以上から説明されるが、この問題については後で再び触れることにする。

状態受動の意味的本質は「結果性」にあるという理由で、着点のない事象を表す nzV 型の他動詞は、状態受動に使用できないことが分かる。ヘルビヒの分類では、クラス V がこれに含まれる。(5)(6)及び(7)がその例である。

(5) Die Soldaten bewachen den Gefangenen.

(6) Der Gefangene wird bewacht.

(7) Der Gefangene ist bewacht. (Ibid., S. 219)

(6)(7)から nzV 型の他動詞で形成される事象受動と状態受動の意味は、ほとんど同義である。(7)が状態受動と認められないのは、事象の「進行性」による。「進行性」を生じさせるのは動作主であるがゆえに、受動の過去分詞 bewacht は形容詞ではない。しかし、ヘルビヒが「普遍的状態形式」(allgemeine Zustandsform) と呼ぶ sein+Partizip II の構文は「結果性」を意味に含んでいるにも拘らず、状態受動とは見做されない。その理由は「目的語に或る変化を与え新しい状態に至らせる過程、或いは目的語に持続的作用を与える過程を引き起こす動作主」と主語が一致しないからである (Ibid., S. 219)。例えば、下の例文(8)の viele Berge は主語の位置にあるが動作主ではないことになる。従って、例文(9)(10)は受動ではなく、単なる客観的自然状況を記述した(8)の裏返しに過ぎない、これまた客観的状态の記述文である。この様に考えるなら(9)(10)の受動の過去分詞 umgeben は、ほとんど形容詞に近いと考えられ、多少奇妙な結論になる。

- (8) Viele Berge umgeben die Stadt.
- (9) Die Stadt wird von vielen Bergen umgeben.
- (10) Die Stadt ist von vielen Bergen umgeben. (Ibid., S. 220)
クラスVI

動作主と主語の一致という問題について、さらに次の例を見てみる。

- (11) Die Stadt wird von vielen Gärten / durch viele Gärten / mit vielen Gärten umgeben.
- (12) Die Stadt wird von den Siedlern durch viele Gärten umgeben.
- (13) Die Stadt ist von vielen Gärten / durch viele Gärten / mit vielen Gärten umgeben. (Ibid., S. 220)

上の例文の Gärten など人の手によるもの (Artefakt) には動作主が想定されるので、例文(11)は(12)の事象受動と(13)の状態受動の両方に解釈できる。下の例文(14)の様に主語の位置に所謂具格 (Instrumental) が現れている能動も動作主が想像されるので、(15)の状態受動が考えられる。

- (14) Kerzen beleuchten das Zimmer.
- (15) Das Zimmer ist von Kerzen beleuchtet. (Ibid., S. 220)
クラスVII

(8)から(15)は「普遍の状態形式」の例であるが、その中でも文の或る構成要素から動作主を想像できる場合、その能動は状態受動に書き換えることができる。しかし、それ以外の能動の中の他動詞が受動の過去分詞に変えられる時、それは形容詞的特徴を持つ zV 型の他動詞で構成される能動の主語が動作主でない文、或いは同じ様な能動でその構成要素のどこにも動作主を想像させる契機がない文は、状態受動にはできないというのが、ヘルビヒの結論である。

さらに、zV と nzV の両特徴を併せ持つ動詞の例文を見ても同様である。

- (16) Die Sonne wurde von Wolken verdeckt.
- (17) Um 9 Uhr wurde die Sonne von Wolken verdeckt.
- (18) Den ganzen Nachmittag wurde die Sonne von Wolken verdeckt. (C. R. L. G., 1987, s. 240 f.)

例文(16)は意味が曖昧であるが、(17)(18)は添加語を付け加えられ、それぞれ事象受動、状態受動の意味を持つとも考えられる。しかし、ヘルビヒの上述した見解に従うなら、先の諸例は動作主を持たないので、受動文とは認められないことになる。つまり、これらの例文中にある過去分詞は、主語の特徴を表す形容詞と見做される。一般に、自然の様子を客観的に記述する能動には、動作主は関与していない。この点に関しては、今まで挙げてきた諸例から明白であろう。動作主が存在が表現されるか或いは想像されうるのかは人が事象や状態に参加しているかどうかによって依存している。例えば、下の例文(19)では、その能動の主語が自然現象で目的語が人である。

(19) Vergeßt nicht, daß Immanuel Kant diese Sterne gesehen hat und von diesem Haffwind angerührt worden ist.¹⁴⁾

さて、受動の中で使われる過去分詞が本来の受動を形成する過去分詞であるのか、それとも形容詞であるのかという点についてこれまで論じてきた。しかし、次の例は状態受動とは区別されなければならない。

(20) Der Kranke ist gestorben.

(21) Die Frucht ist gereift. (Helbig, 1987, S. 217) クラス II

(20)(21)は自動詞の現在完了形であるが、シューベルト(K. Schubert)はこれらを状態能動(Zustandsaktiv)と呼び¹⁵⁾、ヘルビヒも或る論文の中で、例文(20)(21)は現在形としても通用することを指摘し、(21)はDie Frucht ist reifと同義であるとし¹⁶⁾、ブランド(M. Brandt)は自動詞の現在完了形を状態述語(Zustandsprädikate)から成る結果を表す形式であると述べている¹⁷⁾。

次に、(23)はヘルビヒにより状態再帰形(Zustandsreflexiv)と呼ばれ(22)と同義であると考えられている。

(22) Der Lehrer erholt sich.

(23) Der Lehrer ist erholt. (Ibid., S. 218) クラス IV

例文(24)の目的語は、これまで例に挙げた目的語とは性質が異なり、他動詞 enthalten と一緒に用いられ自動詞的機能を果している。(26)の受動が

不適格な文であることからそれが分かるが、(25)は(24)と同義と考えられ、また、in der Flasche から、(24)の主語は動作主ではなく、場所を表していることが明らかである。

(24) Die Flasche enthält Milch.

(25) Milch ist in der Flasche enthalten.

(26) Milch wird von der Flasche enthalten. (Ibid., S. 220)

最後にヘルビヒがクラス I に分類している例を挙げる。

(27) Das Problem ist noch umstritten.

(28) Er ist auf seine Brille angewiesen.

(29) Die Arbeit ist ausgezeichnet. (Ibid., S. 216) クラス I

これらの諸例中に現れた umstritten, angewiesen 及び ausgezeichnet は、語彙として辞書に登録されている例(27)、他動詞として登録されていてその過去分詞である例(28)、及び他動詞の過去分詞と並んで形容詞としても辞書に登録されている例(29)に分かれる。しかし、ヘルビヒは上の例文中の構成要素 sein+Partizip II を形容詞的述語 (adjektivische Prädikativa) と呼び、同一のクラスに属するものとしている。

さて、以上で C. R. L. G. とヘルビヒの論文を手がかりにした状態受動の比較検討を終えるが、次節では受動の過去分詞の特徴に論点を絞ることにする。

2

ドイツ語の受動を形成する過去分詞は、伝統的には形容詞の特徴を持つと考えられてきた。例えば、シュルツ／グリースバハ(Griesbach / Schulz)は「状態受動では過去分詞は形容詞的性質を持ち述部の補足語である」¹⁸⁾と述べ、シューンタール (G. Schoenthal) も1976年の論文の中で「受動を構成する過去分詞は状態受動では、形容詞の特性に近いものとして特徴付けられる」¹⁹⁾と記している。しかし、第1節で見た様に状態受動を形成する過去分詞は、形容詞とは異なる特徴を持っていた。つまり、状態受動を成す過去分詞は、それから派生された能動の主語を意味に含んでいる。

また、英語ではドイツ語の様に事象受動と状態受動の区別をはっきりとは付けないのであるが、ウェイソウ (T. Wasow) は『諸変形と語彙目録』²⁰⁾ の中で、be+past participle で形成される受動を、語彙的受動 (lexical passive) と統語的受動 (syntactic passive) の二つに分けている。前者は形容詞的受動 (adjectival passive) 後者は動詞的受動 (verbal passive) とも呼ばれる。すなわち語彙的受動を形成する過去分詞は形容詞としての性質を持ち、他方統語的受動を構成する過去分詞は動詞としての性質を持つ。ウェイソウによる両受動についての説明には触れないで、ここでは、ウィリアムズ (E. Williams) の統語的受動の説明を見てみたい。

さて、彼は受動は繰り上げ (raising) と同様な過程を経て形成されるとしている²¹⁾ので、まず繰り上げ構文(30)の形成過程について述べたい。

(30) John seems sad.

(30)は下の(31)の過程を踏んで形成される。

(31) John (seems AP _i) _{VPi}	(AP=形容詞句)
↓	(AP=動詞句)
A _i	(A=形容詞)
↓	(th=theta roll)
sad _i	(i=index, 指標)
↓	(th _i) は θ 役の移動を示す。
(th _i)	(Williams, 1987, S. 437)

以下、図(31)について説明する。まず、動詞 seem は、形容詞句を取る。Aは、或る抽象的操作²²⁾により、その範疇にθ役 (theta roll)²³⁾が付与され、iはそれを束縛することを表す。語彙項目 (lexical item) sad が挿入されても事情は変わらないが、θ役は独立変項 (argument) に付与されなければならないので、動詞句 seem sad が抽象化され、θ役が sad から動詞句に継承され、さらに動詞句の主語の位置にある名詞句 John にθ役は再付与される。彼はこのような主語と述語の関係を叙述 (predication)²⁴⁾と呼び、叙述の主語を外部独立変項 (external argument)²⁵⁾と名付けている。

次に、受動の例を見てみる。

(31) John was [killed t_i] VP_i. (Ibid., S. 438)

(32) NP seems [John sad].

(33) John seems [t sad].

まず、例文(32)(33)を説明する。痕跡とは「D構造 (D-structure) が、 α 移動という規則によって、S構造 (S-structure) に写像され、その結果、先行詞と同一の指標が与えられた (coindexed)」²⁶⁾ 構成要素である。これに従うなら、例文(30)は(32)のD構造を持ち、これに α 移動を適用した結果がS構造(33)である。

しかし、ウィリアムズでは痕跡は移動の後に残された構成要素ではない。

(34) [The man [believed t_i to have left] VP_i] NP

(35) a. John_i [wants Mary_j to be [seen t_j]VP_i] VP_i.

b. John_i [wants Mary_j to be [seen t_i]VP_i] VP_i.²⁷⁾

ウィリアムズは痕跡について次の様に述べている。すなわち、例文(34)は名詞句であり、従って、過去分詞 *believed* は主語の位置を持たず、痕跡の先行詞は移動した名詞句 *The man* ではなく、痕跡 t_i 自身もその後に残された構成要素ではない。痕跡は、それを含む唯一の動詞句が1項述語であることを表すために置かれた束縛された変項 (bound variable) であり、この様な述語はそれを含む最小の節に束縛されるので、下接の条件 (Subjacency condition) は必要でないと言われ、彼はこれを、厳密不透明性の条件 (strict opacity condition) と呼んでいる²⁸⁾。例文(35)の *seen* は1項述語であり、それを含む最小の節内にある *Mary* が唯一の先行詞であるから(35) bは不適格な文である。

受動の例(31)も同じ要領で説明される。つまり、受動の過去分詞 *killed* は目的語の位置で生成された痕跡を束縛し、この束縛は動詞句に継承され、叙述によって名詞句 *John* に再度継承される。ただ、例文(33)が示す様に、形容詞の痕跡は主語の位置に直接生成されるのに対して、受動の過去分詞の場合は目的語の位置に生成される点が大きな違いであり、これが形容詞と受動の過去分詞の相違である。

さて、ウィリアムズの受動の説明では能動の主語について解説されていなかった。しかし、統語的受動は能動と統語論的に関係付けられている。従って、先に述べた痕跡と下の例(38)の語彙的痕跡とは区別されなければならない。

(36) The window broke.

(37) [_s [NP e] [VP [broke] window]] (Chomsky, 1981, S. 105)

(38) [_s NP_i [VP [t_i]]]

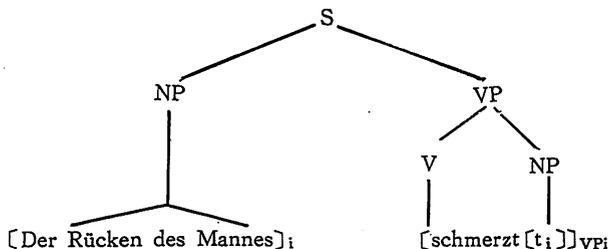
カイザー／レーパー (S. T. Keyser / T. Roeper) は、他動詞からの能格(ergative)動詞の生成を、(38)の様に定式化している²⁹⁾。これは、語彙目録(lexicon)の中で行われ、能格動詞³⁰⁾は目的語の位置にあった名詞句を主語の位置に下位範疇化し、その目的語の位置には語彙的痕跡を残すと説明されている。しかし、統語論的には、(37)をD構造とし、それに α 移動を適用して得られる(36)が能格動詞の派生ということになる。

以上をまとめると次のようになる。すなわち、ウィリアムズ(Williams, 1987, S. 437 ff.) が述べている様に受動或いは形容詞を述語とする構文に使われる痕跡は、ラムダ演算子(lambda operator)³¹⁾ が果す様な抽象化によって生成され、痕跡は受動の過去分詞或いは形容詞が意味する特徴の集合で、この集合は、それを特徴として持つ外延及び内包的指示物(referent)に付与されるまで繰り返し姉妹関係(sisterhood)にある構成要素に再付与される。例えば、例文(39)は(40)と書き換えられ、(41)の構造を仮定するなら、痕跡は結局、主語の位置の名詞句まで移動することになる。

(39) Dem Mann schmerzt der Rücken.

(40) Der Rücken des Mannes schmerzt.³²⁾

(41)



ウィリアムズが用いているラムダ演算子は、モンタギュー意味論で主に使われている。ラムダ演算子は様々な場合に使われるが、その中で、個体昇華体 (individul sublimation) と呼ばれる或る特定の個体が持っている属性の集合を表す場合を見てみる³³⁾。

モンタギュー文法には、個体名項 (term) と呼ばれる統語範疇があり、これには、世界にある対象物を意味する名称である名辞が意味的に対応している。例えば、或る個人に付けられた名前や或る個物に与えられた名前などがそれに属している。この様な個人や個物は、それが持っている属性の集合として考えられ、個体昇華体とは、ラムダ演算子の操作により抽象化された属性の集合である。例えば、或る特定の個人 John は(42)の様に表すことができる。

(42) $\lambda P[P\{j\}]$ (Bach, 1980, S. 338, notes 3 参照)

$P\{j\}$ は属性を抽象化された関数を表し、 λP は属性の集合を表している。

さらにもう一つの例として、述語抽象体 (predicate abstract) と呼ばれる場合を見てみる。例えば、Mary loves John は、(43)の様な式に翻訳される。

(43) $\lambda P[\forall P(m)]$ (^love' ($\lambda Q[\forall Q(j)]$)) (Ibid., S. 299, 338 参照)

(44) $x[L(j)(x)](m)$ (ダウティ他, 1987年, 111ページ)

また、(43)は(44)と等価であり、(44)は「 m は j を愛しているような x である」と読むことができ、love の様な2項述語、つまり他動詞を1項述語即ち自動詞と同じ統語範疇として扱っている。

ところで、ウィリアムズは次の例にもラムダ演算子を使っている。

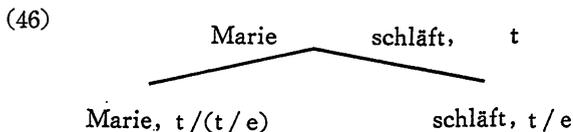
(45) $John_i$ [became a doctor_i]_{VP_i (Williams, 1980, S. 203)}

(44)の動詞句 become a doctor は1項述語と見做され、指標 i は名詞句 John に付与されるまで移動している。

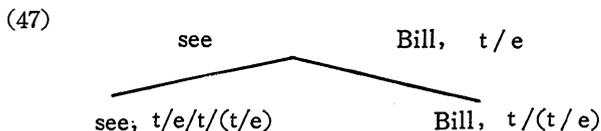
さらにまた、バック (E. Bach) は上の(45)の動詞句をアジュキエヴィ

ッチ (K. Ajukiewicz)³⁴⁾ に始まる範疇文法 (categorial grammar) に基づき、動詞 become は述部名詞 (predicate noun) を取り自動詞的な機能を持つ自動詞句 (intransitive verb phrase) を形成し、IVP / Pred N と表すことができると述べている³⁵⁾。さらに彼は受動を形成する過去分詞に関して、一般に他動詞は、受動の接辞、即ち過去分詞形成詞 (past participle former) を取り、受動句 (passive verb phrase) を形成し、be 或いは get と共に用いられ自動詞句を形成すると述べている (Bach, 1980, S. 314)。

これらは、バックも述べている様に (Ibid., S. 299) 統語範疇と意味範疇を1対1に対応付けていく構成性原理 (the principle of compositionary) 別名フレーゲの原理 (Frege's principle) に従っている。構成性原理とは、全体の意味を部分の意味から複合的に作り上げていく原理であり、二つの基本範疇 'e' (entity) 及び 't' (truth value) から言語上の諸範疇を導き出す。例えば、自動詞は t/e と表記され e を取り t になることを表している。名詞句は t/(t/e) と表記され t/e を取り t になることを表す。この二つにより形成される文、例えば、Marie schläft は次の分析樹 (analysis tree) で表される。



また、他動詞は t/e/t/(t/e) と表わされ、例えば、see Bill は(46)の様になる。



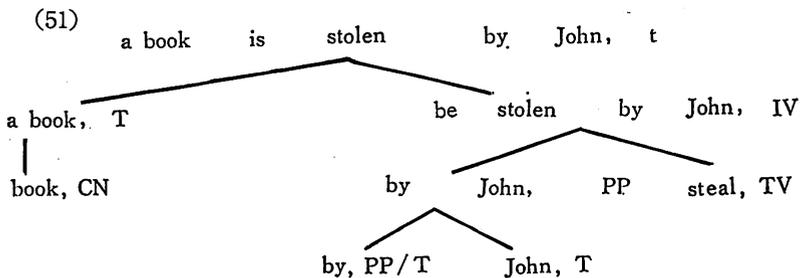
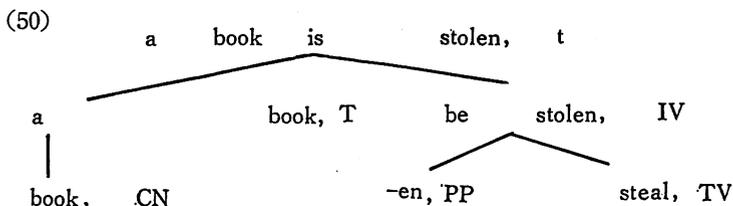
(47)の動詞句には t/e という範疇が割り当てられ、(46)の自動詞 schlafen と同じ範疇であることが重要な点である。

さて、論題を受動に戻そう。ここでは、ダウティ (D. Dowty) によるモンタギュー文法を応用した受動についての考察を見てみる。彼は受動を、動作主が述べられていないもの (truncated passive, agentless passive) と動作主が述べられているもの (full passive, agentive passive) の二つに分類している。下の例文(47)は前者であり、(48)は後者の例である³⁷⁾。

(48) a book is stolen

(49) a book is stolen by John

それぞれの分析樹は下の様になる。



分析樹中の略語はそれぞれ次のものを表わしている T(termphrase, つまり nominal phrase), PP(past participle former), TV(transitive verb), IV(intransitive verb), CN(common noun)。

さて、分析樹は下から上へと構成される。従って、(49)では、まず過去分詞形成詞が他動詞と結びつき受動句を形成し、これが名詞句を取り文になっているのに対し、(50)では動作主を表す前置詞句が過去分詞形成詞で、これを取った他動詞が受動句を形成している。

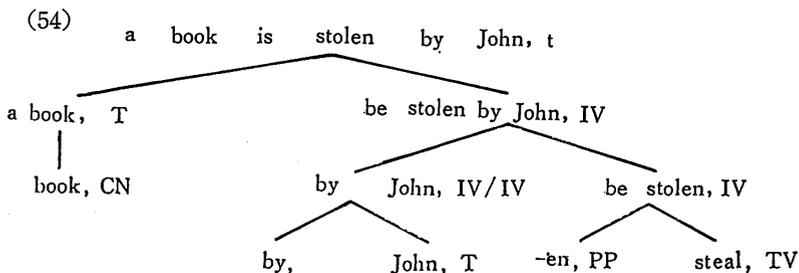
また、受動の接辞 *-en* は、受動の主語を能動の目的語の様に翻訳し、能動の主語の代わりに存在量化子 (existential quantifier)³⁸⁾ を書き入れる役割りを果し、(48)は “someone or something stole the book”³⁹⁾ と翻訳される。これに対し(49)の動作主を表す前置詞は、能動の主語と目的語をそれぞれ、受動の動作主を表す前置詞の目的語と受動の主語として翻訳させる。記号を使って表すと(52)(53)のようになる。

(52) *-en* translates into $\lambda R \lambda x \lambda y [{}^{\vee}R(y, \hat{P}[P\{x\}])]$

(Dowty, 1978, S. 403)

(53) *by* translates into $\lambda P \lambda R \lambda x P\{\hat{y}[{}^{\vee}R(y, \hat{P}[P\{x\}])]\}$, where *R* is $V_0, \langle s, t \rangle$

ところで、(49)について次の様な分析の仕方も考えられる。



分析樹(54)が(51)と異なる点は、過去分詞形成詞の相違にある。(54)では受動の接辞であるのに対して、(51)では *by*-phrase がその役割を果している。従って、(54)では、先の(50)の分析樹で見た様に、或いは(52)の翻訳で明らかである通り、主語には存在量化子が加えられ、主語を成すのは John だけではなく、不特定多数の「誰か」であり、John はその多数の中の 1 人に過ぎないことになる。これは明らかに能動の意味を正しくとらえていない。構成性原理は統語分析に意味的制約 (semantic constraint) を加えていることを上の例(54)が明らかにしてくれる。「構成性原理は可能な統語分析を限定」⁴⁰⁾ しているといえる。

しかし、次の例文(54)と先の例文(47)を比較するなら、受動を形成する

分詞形成詞を含む時の翻訳(52)が適用される。この場合、動作主は行為、動作を行う動作主ではなく、それらを終えてしまった動作主ということになる。この様に考えるなら、(10)も状態受動であると見做すことも可能であり、ヘルビヒが(10)を状態受動と認めなかった理由は動作主を規定することの難しさにあると思われる⁴³⁾。

その他の例については次のことが言えるだろう。まず、(7)は意味に結果性を含まないから、事象受動に近いと思われる。(27)(28)及び(29)の状態受動を形成する過去分詞は語彙的なものである。

ところで、Duden (Die Grammatik, 1984, S. 181)によると、行為、動作を表す事象受動でさえ、その約90%が動作主なしで文章中に現れている。このことを思えば、状態受動でも動作主のほとんどが述べられないのは当然であり、またこの点が受動を形成する過去分詞が形容詞的の性質を持つものと思わせる面でもある。しかし、やはり事象受動及び状態受動を含めた受動一般の本質は、メラー (G. Möller)⁴⁴⁾ も述べている様に、「動作主を背後に残し……事物をわざと不明瞭なままにさせておく」ことにあると思われる。しかし、状態受動では動作主が事象受動よりもっと背後に退き、エガースが述べた様に、その本質は事物に向けられた素質にある様に思われる。

注

- 1) 最初に「状態受動」(Zustandspassiv)と言う名称を使ったのはグリンツ (H. Glinz) である。東ドイツではヘルビヒが Zustandspassiv と呼び、彼の弟子達もそれに倣っている。他方、プリンカー (K. Brinker)、シェーンタール (G. Schoenthal) 等は sein-Passiv とする用語を用いている。Duden (Die Grammatik, 1984) はこの二つの用語を同じ意味で使っている。
- 2) Duden: *Die Grammatik*, Mannheim, 1984, S. 176 ff.
- 3) Jean Fourquet: *Grammaire de l'allemand*. Paris, 1952, S. 137.
- 4) Yoshihiko Nishimoto: *Über das Passiv im Indogermanischen und Finnisch-Ugrischen unter Berücksichtigung des Japanischen*, Unpublizierte Dissertation der Humboldt-Universität zu Berlin, 1971, S. 6 f.

- 5) Karl Vossler: *Das Passivum, eine Form des Leidens oder Zustands?*
In: *Die neueren Sprachen* 33-6, S. 401-407.
- 6) Meyer-Lübke: *Vom Passivum*, In: *Die neueren Sprachen* 33, 1925, S. 158-171.
- 7) Leo Weisgerber: *Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen*.
Düsseldorf, 1963, S. 233 ff.
- 8) Hans Eggers: *Modale Infinitivkonstruktion des Typs er ist zu loben*.
In: *Sprache der Gegenwart* 24. Linguistische Studien IV, Festgabe für
Paul Grebe zum 65 Geburtstag, T. 2, 1973, S. 45, Anm. 19.
- 9) Noam Chomsky. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht, 1981,
S. 122.
- 10) Klaus Brinker: *Das Passiv im heutigen Deutschen*. München, 1971, S. 78.
- 11) Gerhard Helbig: *Das Zustandspassiv*, Leipzig, 1973, S. 14.
- 12) C. R. L. G.: *Transformativität und Intransformativität. Zur Interpretation deutscher Passivsätze*. In: *Das Passiv im Deutschen. Akten des Kolloquiums über das Passiv im Deutschen*, Nizza 1986, Tübingen, 1978.
- 13) G. Helbig: 1973. 及 及 Zur Klassifizierung der Konstruktion mit sein + Partizip II (Was ist ein Zustandspassiv ?), In: *Das Passiv im Deutschen, Akten des Kolloquiums über das Passiv im Deutschen*. Nizza 1986, Tübingen, 1987. 及 及 Das Vorgangspassiv. Leipzig, 1972.
- 14) Willy Kramp: *Meditation am frischen Haß* 1981. S. 15.
- 15) Klaus Schubert, *Aktiv und Passiv im Deutschen und Schwedischen*.
Kiel, 1982, S. 177 ff.
- 16) G. Helbig: *Zum Problem der Genera des Verbs in der deutschen Gegenwartssprache, Deutsch als Fremdsprache* 5. 1968, S. 142.
- 17) Margareta Brandt: *Das Zustandspassiv aus kontrastiver Sicht, Deutsch als Fremdsprache* 5. 1968, S. 30.
- 18) Dora Schulz / Heinz Griesbach: *Grammatik der deutschen Sprache*.
München, 1960, S. 63.
- 19) Gisela Schoenthal: *Das Passiv in der deutschen Standardsprache*.
München, 1976, S. 22.
- 20) Thomas Wasow: *Transformations and the Lexicon*. In: Culicover, T.
Wasow, & A. Akmajian (Hrsg.): *Formal Syntax*. New York, 1977.

- 21) Edwin Williams: *NP Trace in Theta Theory*, In: *Linguistics and Philosophy*. 10, 1987, S. 437 ff.
- 22) Williams はこれを vertical binding と呼んでいる。(Ibid., S. 440)
- 23) theta roll については Chomsky, 1981 を参照。
- 24) E. Williams: *Predication*. In: *Linguistic Inquiry*, 11/1, 1980, S. 203-238.
- 25) E. Williams: *Argument Structure and Morphology*. In: *The Linguistic Review* I. 1981, S. 81-114参照。
- 26) N. Chomsky: 1981 S. 106. また, D構造, S構造, 移動については同書参照。
- 27) E. Williams: *Grammatical Relations*. In: *Linguistic Inquiry*, 15/4, 1984, S. 670 f.
- 28) E. Williams: 1984, 1987 参照。
- 29) S. J. Keyser / T. Roeper: *On the middle and ergative constructions in English*, In: *Linguistic Inquiry* 15/3. 1984, S. 401 ff.
- 30) 能格動詞については R. M. W. Dixon, *Ergativity*. In: *Language*. Vol. 55, 1979, S. 59-137 及び N. Chomsky, 1981, S. 364-411 参照。また, 受動の構造と能格動詞によって形成された文の構造の類似性を デン・ベステン (den Besten, *Some remarks on the ergative hypothesis*. In: *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 21. 1982, S. 65 ff.) は指摘している。受動を形成する際のドイツ語と英語の格構造の違いについては Osvalde A. Jaeggli. In: *Linguistic Inquiry* 17/4. 1986, S. 590 ff. 参照。
- 31) ラムダ演算子については、『モンタギュー意味論入門』, 井口省吾他訳, 三修社, 1987, 110ページ以下, 及び池谷彰, 『ラムダ演算子と言語分析(1), (2)』, 「英語青年」, 第131巻第10, 11号, 研究社, 1986年, 参照。
- 32) Alexander V. Isacenco: *Das syntaktische Verhältnis der Beziehungen von Körperteilen im Deutschen*, In: *Studia Grammatika* V. Berlin, 1965, S. 9.
- 33) モンタギュー文法で使われている用語については, 前掲書『モンタギュー意味論入門』を参照した。
- 34) K. Ajdukiewicz: *Die syntaktische Konnextät*, In: *Studia Philosophica*, 1935, S. 11-27.
- 35) Emmon Bach: *In Defense of Passive*, In: *Linguistics and Philosophy* 3.

- 1980, S. 337.
- 36) Kyung-Au Song: *Das Passiv Seine Form und Funktion*. Bochum, 1986, S. 142.
- 37) David Dowty: *Lexically Governed Transformations as Lexical Rules in a Montague Grammar*. In: *Linguistic Inquiry* 9/3. 1978, S. 397 ff.
- 38) 本文中の例(51)の -en の翻訳参照。
- 39) D. Dowy, 1978, S. 398 f. 参照。
- 40) 白井賢一郎, 『形式意味論入門』, 産業図書, 1985年, 306ページ。
- 41) 例えば, der gehaßte Feinde ein gebundenes Buch 等の例が挙げられる。ein von zwei Lokomotiven gezogener Zug の冠飾句は動詞的性質を持つと思われるが, Zug の前の位置は形容詞の位置である。また, der Geliebte, der Geprüfte 等も例に挙げられるだろう。
- 42) das Partizip II „nähert sich den adjektivischen Prädikativa“, G. Helbig. 1973, S. 14.
- 43) 動作主を含む受動は次の様にも翻訳できる。例えば, John is kissed by Mary は $[Ex[kiss^*(x, j)]] \wedge AGENT(m)$ [Kyung-Au Song, 1986, S. 150] の様になる。
- 44) Georg Möller: *Guter Stil im Alltag, Eine neuartige Satzbauschule*. Leipzig, 1958, S. 94 f.

Über das Passiv

—insbesondere über das Zustandspassiv—

Akira SHIDA

Im Deutschen ist das Passiv in zwei verschiedene Formen eingeteilt: Vorgangspassiv (werden-Passiv) und Zustandspassiv (sein-Passiv). Aber es ist beachtenswert, daß es im Deutschen zwei unterschiedliche passivische Formen gibt, weil in anderen Sprachen wie etwa im Englischen oder Französischen die beiden Passive in der-

selben syntaktischen Formen auszudrücken sind.

Es ist ein ungelöstes Problem, ob das Passiv durch Transformationen abgeleitet wird oder nicht. Darüber hat Noam Chomsky, der Begründer der transformationellen Grammatik, bemerkt, daß sich das Passiv durch von ihm *move- α* genannten abstrakten Regeln aus der D-Struktur ableiten läßt. Dagegen stellen andere Linguisten, die sich mit Montague Grammatik beschäftigen, fest, daß das Passiv mit der Operation, „*caterory changing*“ genannt, unter Berufung auf Freges Prinzip gebildet werden kann. Es scheint, daß auch das Passiv im Deutschen für beide oben genannten Betrachtungsweisen zugänglich ist. In der vorliegenden Arbeit möchte ich zunächst auf das Zustandspassiv, das die Form „sein+Partizip II“ hat, beschränken. Dann ist eine Frage gestellt, ob der Charakter des Partizips II verbal oder adjektivisch ist.

Der vorliegende Aufsatz hat vier Abschnitte. Im ersten Abschnitt wird das Gefüge aus „sein+Partizip II“ aufgrund von Gerhard Helbig (1987) in 7 Klassen unterschieden. Dazu möchte ich die Klassifizierung von C. R. L. G. (1987), nach den drei verbale Gruppen unterschiedbar sind, berücksichtigen. Zusammenfassend läßt sich sagen, daß von 7 Klassen nur die dritte Klasse (Helbig), die „zielgerichteter Gruppe“ (C. R. L. G.) angehört, das Zustandspassiv bilden kann, denn nach Helbig drückt es einen vom Vorgang hervorgerufenen Zustand aus, mithin bedeutet das, „daß die Übereinstimmung von Agens und Subjektnominativ im aktivischen Satz eine Voraussetzung für die Bildbarkeit des Passivs ist“ (Helbig). Also ist Partizip II im Zustandspassiv nicht adjektivisch, sondern verbal.

Im nächsten Abschnitt wird die von Edwin Williams angegebene abstrakte Operation „*vertical binding*“, die auf das Passiv angewandt ist, erörtert: Partizip II der transitiven Verben subkategorisiert eine nominale Phrase, die „ein externes Argument“ ist. Im Zustandspassiv hat des externe Argument, das sich durch ein der Lambda Ope-

ration ähnliches Verfahren oder „vertical binding“ aus einem transitiven Verb ausziehen läßt, auch Funktionen vom Objekt im Aktiv. Folglich verfährt das Gefüge „sein+Partizip II“ wie ein intransitives Verb. Partizip II weist einem Argument innerhalb der VP eine Theta-Rolle zu, aber das Argument liegt auf der subjektivischen Position. Also folgt daraus, daß Partizip II vom Adjektiv verschieden ist, obwohl viele Linguisten wie zum Beispiel Jean Fourquet und Wladimir Admoni Partizip II als adjektivisch angesehen haben.

Im dritten Abschnitt möchte ich den Lambda Operator und Kategoriale Grammatik, die man ihren Ansatz in einem von K. Ajdkiewicz geschriebenen Buch „Die syntaktische Konnexität“ hat, erörtern.

Nach solchen Überlegungen wird es im letzten Abschnitt deutlich, daß das Partizip II im Zustandspassiv einen adjektivischen Charakter hat.